

# アメリカの新島襄

伊 藤 彌 彦

- 一 密航者・新島襄―旧世界からの脱皮
- 二 ニューイングランドの新島襄
- 三 結びにかえて

## 一 密航者・新島襄―旧世界からの脱皮

### 密航者の不安

密航者には不安が常につきまとう。自分の身に何が起こるか分からないという予測不能性のために、また多くの場合所持金をもたないゆえの脅えがひそむ。新島襄の脱国は、江戸の新島家・江戸安中藩邸から函館への移動と、函館から米国ボストンへの脱出の、いわば二段ロケット方式で行われたが、注意しておきたいのはその二つの段階の基本的条件がまったく違うことである。一段目の函館行きは合法的離藩であり、藩から下付き

れた一年分の修学料十五兩を含む二十五兩の所持金を持つての移動であった。これに対して二段目の米国行きの場合は、国禁を破る非合法的行動であり、有り金集めてわずか四兩の所持金、無一文に近い条件での行動であった。本節ではこのうちの後者の脱国、密航について考察する。

函館からの船出は密出国という非日常的行動であった。長らく鎖国を国是としてきた日本から国外脱出を図ることは、当然ながら、生命の危険をはらむ。青年新島が直面したであろう不安と緊張については、第一に出国時、第二に途中の船内生活、そして第三に入国時の三局面が考えられる。

まず出国をめぐる不安と緊張のことであるが、すでにタガが緩みはじめた幕藩体制にあって、事は意外に順調に進行した。新天地・函館で新たに見つけた友人、福士卯之吉、沢辺数馬、菅沼精一郎の三人、それに旧知の塩田虎尾にむかって新島は自分の計画を打ち明ける。すると、この辺が新島襄という人間力の不思議な魔力というべきか、新島に他人を見る眼力が備わっていたというべきか、皆、意気を感じて危険を顧みず協力を申し出てくれたのである。そして成功の鍵を握る外国船探しの問題でも、米国船籍ベルリン号の船長、W・T・セイヴォリーがこの青年の志に一肌脱いでくれる強運に恵まれたのである。これで所持金なしの船中生活が基本的に保障されることとなった。出国は実に順境に包まれて実現したのであった。

第二の局面、船中生活の場面では、多くの困難とストレスが重なる時間が待っていた。金銭を持たない密航者にとって、乗船中の運命は相手しだいである。ただ新島の場合、途中で船が変わったから事情が変わる。ベルリン号で一八六四年七月一七日から八月一日まで足掛け二五日を過ごした後、上海でワイルド・ローヴァー号に乗り換え、同船で一八六五年一〇月中旬までの約一年二か月を過ごすことになった。とくにストレスが

強かったのは前半である。「中国まで不愉快な旅が続いた。そして十日間というものの、何かの裏切りによって日本に送り返されはしないかという不安を絶えず感じながら〔シャンハイ港で〕待った」（マッキーン。北垣訳、七四）。これは相手側の事情にもよるが、自分側にも原因があった。新島自身まだ粗野な幕末士族意識の丸出しのままで乗船し、文化摩擦に晒されることになったのである。つまりこの船中期間は江戸社会で成人した武士がアメリカ人船員社会と手荒く接触し、旧い伝統社会の価値秩序を打破される過程でもあった。いずれにせよ元治元年六月十四日（一八六四・七・一七）、米国船ベルリン号に乗船した夜から新島のアメリカ体験は始まったと見るべきであろう。

船中生活の分析は、すでに別稿「新島襄の洗濯」（『のびやかにかたる新島襄と明治の書生』所収）で論じたので、ここでは要点を掲げるとどめる。

「船頭より言付けられし我の役目は、船頭部屋の掃除、彼の給仕及茶碗等を洗ひ、彼の犬をやしなう等なり。日々船頭吾に僅かの英語を教え呉れり」（新島全集5、七二）。無賃乗船の対価として船長室付きの雑用を命ぜられたわけである。これはかなり配慮された役割と思われるが、肉体労働自体を蔑視する儒教文化にどっぷり浸かっていた武士階級の青年にとって、それは快からぬ仕事だったようである。これ以外にも乗船七日目の手記には、「吾れ今言語通じざる故空く支那人の指揮を受けり、然し他年彼等をして豚犬の如くならしめん」と物騒な言葉を書き連ねられている。水夫との軋轢はそれ以上だったのであろう。またこの日は親の手を借りず初めて自分の下着三枚を自分で洗濯したことを大仰に記録している。

今後の生活のためにも、「学問の為」のためにも英語の習得は必須であった。早速に新島は船長はじめ洋人に働きかけを試みたが成功しない。「甲比丹<sup>カピタン</sup>一切書を教へず」。発音を尋ねた洋人からは「真似出来ざれば怒声

を發し、或は鼻と頤に手を掛け口を開きて、おとがと云へと申せし事有り」と散々の状態であった。そして彼らのことを「貪欲鄙劣の者なる故」（新島全集5、三九）と一方的に批判するのであった。

肉体労働を蔑視し、自分の存在理由を「學問」や「憂国」という武士的使命感に求めていた世間知らずの青年のプライドは大きく傷ついた。本人が書き残した記録をみると、船中での体験は新島青年にとって決して愉快なものではなかった。アメリカ人船員との異文化接触、しかも言語不通の悪条件下で、カルチャー・ショックの波状攻撃にさらされて、刀に手をかけそうな人格破綻寸前のところまで追い込められる経験をもったのである。

しかしこのセイヴォリー船長は決して新島に悪意的であったようには思えない。新島の服装を見るに見かねていたのであろうか、「コウス及ひスラウジルス〔clothes, drawers〕を与えた」のであり、さらに他日にも「古きコウス〔clothes〕を与」えているのである（<http://joseph.doshisha.ac.jp/ihinko/> 目録番号0660）。

このことは別のノートにも「船頭吾に一の筒ばふ及一の股引を与へり」（新島全集5、七三）と表記されている。「貪欲鄙劣の者」とは言い過ぎであろう。さらに上海に到着した時、アメリカに行く船を捜し、新島の乗船を手配して責任を果たしてくれた。そして後日、船がボストンに入港した時にはわざわざ新島に会いに来てくれ感動的な再会をしている（新島全集5、六八）。なおセイヴォリー船長は新島の密出国幫助が露見してベルリン号を解雇されてもいたのである。

ところで『航海日記』には、このベルリン号のなかで「今日セーロールより借りたる耶蘇經典を読む事少許すこしばかりなり」とある。バイブルそのものを読んだのである。その意義については後述する。

上海で日本に引き返すことになったベルリン号を離れ、移乗したのはワイルド・ローヴァー号であった。船

主はアルフイーアス・ハーディー、ボストンでハーディー商会や銀行業を営むピューリタン商人であった。幸いにも船長H・S・テイラーは紳士であった。「船主頗る温和にして、我を役するにはなほだ慇懃なり」。このとき新島襄は「実に虎口を脱してやうやく佳郷に入りし心地なり」と洩らしている。この船でも船長室付きとなり、船長の雑用を仕事としていた。船長は親切で、自分を兄弟のように扱ってくれたという。ジョセフ、通称ジョウという呼び名はテイラー船長の命名であった。そして船長の聡明な判断で一般水夫からは遠ざけられて日を送った。テイラーは新島の高い学力に気づいたようである。航海中いちばん楽しんだこととして船の位置を計算式を用いて船長と共に出すことであった(A.S.Hardy, 四一)。「航海日記」には測量結果や計算式が残っている。

新島のなかに精神的ゆとりが生まれ、洋上にあつてのびやかな解放感をえていた。

#### 船中偶成

何百の白駒去つて匆匆

往時けむりの如く是れ空し

かち得たり我身筋骨慥なるを

一年強半船中に在ればなり

幕末の騒乱ははるかに遠ざかり、いまや肉体労働で筋骨逞しくなった青年新島襄が誕生したのである。

衣服の不足には悩まされつづけたようで、持参した和服の裏地をほどこき筒ぼうと襦袢を作ったというからほほえましい。そのとき「我持前之役目は勿論、自分の衣類を洗ひかつ補綴し、空しく光陰を送れり、然し余暇あれば文を学べり。我重衣の裏を取り筒ぼう襦袢を為れり。吾茲に於て深く父母眷顧の鴻恩に感じ『苦を嘗め

て知れ親の恩」と云へり」（新島全集5、七六）と記す。注目すべきは洗濯、裁縫などの労働に従事する人への感謝の念が書かれていることである。つまり人間が成長したのである。この長い船中生活こそが旧慣を破り、アメリカ文化を知る、いわば新世界へのオリエンテーション期間となった。それゆえに、アンドーヴァーでヒドン家に下宿したとき、スムーズに溶け込めたと考えられる。

### 「脱国の理由」の謎を追う。

本稿でとくに論じたいのは第三局面、入国にまつわる不安と緊張の問題である。密航生活のなかでここがいちばん深刻かつ重大な場面、運命の別れ道であった。が、一転、劇的な展開を見せて新島を強運に導くことになる。

ワイルド・ローヴァー号は「〔一八六五年〕July 20<sup>th</sup> 波士頓<sup>ボストン</sup>へ落碇」（新島全集5、六七）し、七月二十四日に新島は初めて新大陸に仮上陸した。書店で『ロビンソン・クルーソー』を一ドル半で購入した。ポケットには小刀を売って得た八ドルからの残金しかないはずだからかなり思い切った買い物である。上陸用の「ハシケ」には、「二セントの札を与ふるなり」（新島全集5、六七）と初チップも経験した。しかしまだボストンに上陸できたのではない。当面、テイラー船長の好意で衣服を買い与えられ、ワイルド・ローヴァー号内で宿泊し、船の留守居役と清掃の役目を与えられた。テイラー船長はチャタムの自宅に帰ってしまった。ここに果して新大陸に入国できるか否か、予測がつかない不安の十週間が始まった。「日々船場二出逢フ人々モ心の分からぬ外人ナレハ何ニトナク心細ク、予ノ前途ハ如何ニ成リ行クヘキヤ夜々眠リ得サリシ事モアリマシタ」（「ハーディー氏ノ生涯ト人物」新島全集2、四一七）。

しかも船内清掃は今まで経験しなかったきつい労働で、それを水夫らと共にやっている。「船頭吾に船番の役目を言付、日々船内の掃除をなさしめたり。日々の働きにて、夜分寐間に入れば早速眠り、朝目覚むれば総身いたみ、自由に我身を動かす事能わず」(新島全集5、七八)。周辺からは、「学問の目的」で入国することなど無理な話だろう、「南北戦争後の物価高騰で、誰も手を差し伸べてくれたりはしないよ。もう一度海に帰るな」という声が耳に届いたとこう (A.S.Hardy, 九—一〇)。気は滅入るばかりである。

この状況を一変させて、新島の運命を転換させたのは船主ハーディーとの出会いであり、そのハーディーを動かしたのが新島襄の一世一代の作文というべき「脱国の理由」であったことはよく知られている。劇的な運命の展開であった。

「脱国の理由」はいつ書かれ、いつハーディーは読んだのだろうか。これについてはハーディーの三男 A.S.Hardy が書いた伝記『新島襄の生涯と手紙』(訳は新島襄全集10。原著から引用するときは A.S.Hardy と表記)での記述が通説になっている。それによると、テイラー船長から日本人青年を連れてきたことを知らされた船主ハーディーは新島を呼び出し、話を聴こうとしたが会話が通じない。そこでひとまず船員宿に送りそこで文章に書かせ、三日がかりで出来あがった手記「脱国の理由」を受け取った。「十月十一日にハーディー氏は次のような手記を受取った。」(新島全集10、一一)と、この伝記の著者は書く。

しかしこの記述は新島襄の残した日記類と微妙に食い違う。「航海日記」によれば

「October 11<sup>th</sup>, 1865.

昨日、船ウィルト・ロワル。ストリームを得たり

今日午前、小蒸気船に乘移りポストンに上陸せし、即時船頭 H・S・テールと手を別<sup>わか</sup>れてり、且船番吾を誘ひ

ポルチエス街の船子家に来らしめり」(新島全集5、六八)とある。

また新島が上陸四カ月後にまとめた「箱楯よりの略記」の記録においては、「扱波土頓之貴人ハルデー君は、此船ワイルド・ロウアル之持主にして、或日船見聞に参り我の志如何を尋ねし位置し故、我仔細に吾の志願を談じせしかは、彼深く吾の志を愛し、早々上陸せしめ、波士頓の船宿に三値日之間逗留せしめ、・・・」(新島全集5、七八)とある。

『日記』では十月十一日という日は、新島がワイルド・ローヴァー号を下船し、船員宿に移動した日となっている。また『略記』では船員宿への移動はハーディーが新島の志願を仔細に聞いた後のこととなっている。この食い違いは何に原因するか。考えられるのは次の三つの場合、(1)船主ハーディーが手記を受け取った日付を記憶違いした、(2)新島が船員宿に移った日がもっと早かった、(3)「脱国の理由」は船員宿に移る以前に完成していてこの日に受け取った、のいずれかである。私はこの三番目であったと推定している。

船主ハーディーが自分の持ち船ワイルド・ローヴァー号を訪れたのは、ボストン入港直後の七月と、出港直前の十月十一日の二回であったと考えられる。日記に書かれた「ストリームを得たり」の意味がよく分からないが、ワイルド・ローヴァー号が新たな航海に出発することに関する情報ではないだろうか。事実は次のように進行的ではないか。ワイルド・ローヴァー号は新たな任務を帯びて航海に出発することになり、船主ハーディーがふたたび船の視察に訪れた。それが十月十一日であった。テイラー船長はその機会をとらえて新島を再度引き合わせた。この機会に新島はすでに書き上げていた「脱国の理由」をみせた。それで新島の志願が仔細に伝わり、ハーディーの心を深く動かしした。その結果「深く吾の志を愛し、早々上陸せしめ、波士頓の船宿に」移らせた、という順序である。



つまりわたしの仮説は、ハーディーがワイルド・ローヴァー号を訪れる十月十一日以前に「脱国の理由」が完成していた。それを見せることで新島の願望を伝えることに成功した。そして船が出港する以上、新島は下船しなければならなくなり、テイラー船長とも別れ、「船番」とあるから船主でなく船員に案内されて、ハーディーの経営する船員宿にとりあえず滞在することになった。ワイルド・ローヴァー号が新航海に出るぎりぎりのところで新島の運命が開けた、と考えている。太田雄三も推定するように（太田、八六―九二）、これほどの内容の二千四百語に及ぶ作文を新島が三日で仕上げるのはむずかしい、それ以前に船内宿泊していた約三か月の間に作られたものであろう。以下はこの仮説の論証である。

何よりもボストン入港後、上陸をめぐる不安な時間が経過するなかで、新島が頼りにできたのは、テイラー船長一人であった。船中で兄のように遇してくれた恩人である。テイラー船長はいつしか船に戻っていたと考えられる。『新島襄の生涯と手紙』には新島襄がテイラー船長に手渡した拙い英文のメモが掲載されている。

AS.Hardyはこのメモを「ボストン到着の前に」（新島全集10、一八）渡したとするが、その証拠は何も示されていない。ボストン入港後の可能性も大きい。このメモは船主ハーディーに見せられることなく、ずっとテイラー家に留められていたものであり、十七年後にテイラー未亡人からハーディー家に渡されたものである。『新島襄の生涯と手紙』を書くための資料集めに応じて提供されたのであろう。

メモは拙い英文で訴える、「悲しいことに、私は金もなく愚かです。私の周囲にはあなた以外に活路を開ける人はいないのです。ですから、どうぞ、私に私の目的を達するための適切な道を指示して下さいよう心をこめてお願いします。もし私の目的に届くようにしてくださいれば、私はあなたの親切と徳を忘れる事はありません」(AS.Hardy, 11) 云々。

テイラー船長も上海では、渡米就学の目的を持っていることを知ったうえで新島の身柄を引き受けたのであり、その処遇に責任を感じていたはずである。また船長室で雑用をする新島襄を見ていて、その人柄を知り、さらに学力に関しても一緒に測量や船舶の位置計算ができるほど高等数学ができ、アメリカで学問する能力をもつことを見抜いていたであろう。いわばテイラーの一次面接試験に合格して、推薦に値する人物だったはずである。これは「脱国の理由」作成をテイラー船長が手助けしたことの場合証拠になる。

そして新島に泣きつかれた時、思いあたったのは船主ハーディーの存在であろう。新島を船主と結びつけるべく本気で援助する。おそらく航海のつれづれに新島から聞いていたであろう日本脱出の勇敢な行動とその動機を文章にまとめることを勧め、みずからもその添削を手伝った。そして完成させたのが「脱国の理由」であった、というのが私の推定である。

この仮説を裏付けるいくつかの証拠をあげる。ひとつは、先述の切羽詰まって手渡した拙い英語の新島メモの文言が、洗練された英文になって「脱国の理由」に使われていることである。このメモは新島とテイラー船長しか知らなかったものである。

一例をあげる、「新島メモ」の

“I am concerned about it as much as my brain would melted out, and when such musings fell on my head I could not read book at all, I would not do anything very cheerfully, and I looked around myself long time as a lunatic, because it confused my mind very much.” (A.S.Hardy 一一)

が「脱国の理由」では

“When such thoughts pressed my brain I could not work very well, I could not read very cheerfully, and only

looked around myself long while as a lunatic.” (A.S.Hardy 100)

とスマートになっている。

第二のものは状況証拠であるが、「脱国の理由」はあまりにも見事にキリスト教徒の意識でまとめられていること、不思議にも、きわめて整合的に完璧に文中にキリスト教、神、が登場することである。いわく、宣教師が漢文で書いた聖書を江戸で読んで自分が神の創造物であることに気づいた。「英語の聖書を読みたいという思いで」のでイギリス人、アメリカ人のいる函館に行ったが見つからないので、さらに国外脱出を考え、「ひたすら運を神の御手にゆだねた」、「毎晩、寢床に入ってから神にこう祈りました」、「私は思いました。神は私を見棄て給うことはないのだ」と。

新島はいつこれほどのクリスチャンだったのか。これはまるで信心深いアメリカ人の姿である。求道者であったのは確かであるが、ここまで幕末日本そして船中生活で本格的なキリスト教徒に成長して、クリスチャンのような起臥日常を送っていたとするのは出来すぎた話である。

航海中に聖書にまつわる事柄が三つあるが、注目すべきは、ベルリン号上の元治元年六月二十五日（和暦）の項の

「今日セーロールより借りたる耶蘇經典を読む事少許なり。実に帰郷之上再び父母の逢いたる心地恰も如此かくのごときかと思はれ、心の喜斜よろこびなめならず」（新島全集5、四〇）

と記した文章である。なぜここで、唐突に、バイブルを読んで故郷の父母に会ったような心境になり、歓喜に包まれたのか。

私の推定はこうである。江戸で聖書そのものを読んだ証拠はなにもない。実はベルリン号の船上で初めてバ

イブルを読んだのである。少しばかり読む、とは、つまり冒頭の「創世記」を読んだことであり、この時、あの「脱国の理由」にある「私を創ったのは誰か？ 私の両親か？そうではない、それは神だ」（新島全集10、一五）と「天の父」の存在を発見したのである。そして、「心の喜び斜めならず」、故郷の父母に会ったような心境が生まれ、歓喜に包まれたのである、と考える方が辻褄があう。「脱国の理由」においては、この霊的な体験のことを出国以前の体験のように記載する。しかしその頃はまだ『連邦史略』に接した程度であり、そこで「天の父」を知るには不自然さがある。「天の父」の発見はベルリン号上のこの時点であつたと見る方が自然であろう。

またこのことは、「密出国」という暴挙をしたことでの心の負担、「祖父や両親がどんなに悲しむだろうか」（新島全集10、一六）という「親不孝」意識から解放され、行動を合理化する論理に出会った瞬間でもあつた。そして俄然、この時から聖書への関心は高まったのではないか。ワイルド・ローヴァー号に移った後、香港で日本の通貨が通用しないことを知った新島は小刀を八ドルで船長に買い取ってもらい、同年十一月十一日（和暦）それで漢訳の新約聖書を購入した。また翌一八六五年八月九日（陽暦）には、テイラー船長から英文のバイブルを贈呈されている。このようにキリスト教熱に火がついた新島の姿をテイラー船長は見ていたであろう。

こうした経緯で、聖書の勉強をしたい一心で脱国・渡米を図ったという見事な物語が出来ていった。その際、「脱国の理由」の読み手としてハーディーを想定して、ハーディーの人物をよく知っているテイラー船長の添削指導の下、しかも新島の希望どおり授業料を稼ぐための労働を回避する方向を盛り込んだ内容で、まとめられた、とするのが私の仮説である。その際、時間の前後を入れ替え「天の父」の話を江戸の頃に遡らせたり、

表現の誇張がなされたが、新島にも手伝ったテイラー船長にもそう虚偽意識はなかったのではないか。

船主ハーディーの最初のワイルド・ローヴァー号来船の時は、コミュニケーション不全に終わったが、二度目の十月十一日のときは完成していた見事な勉学志願書を見せることができた。「脱国の理由」はピューリタン商人ハーディーの琴線にふれる完璧な志願書であったことは間違いない。その内容に驚嘆したハーディーは納得し、この密航者の身元を引き受けることになった。目論見はみごとに成功した。「キリスト者であったこの船主は、船長から彼の被護者の物語を聞くとともに、世界に向こう側からこうして彼のところへと送られてきた信託物を喜んで受け容れ、ただちに、この若い異国人の支援と教育の全責任を引き受けたのであった」(McKeen 北垣訳、七六)。

新島襄にとって日本出国の恩人はベルリン号船長のセイヴォリーであり、アメリカ入国の恩人はワイルド・ローヴァー号船長のテイラーであった。

その後は「神の恩寵」がふりそそぐように順調に進行した。新島からすればまことに幸運な保護者の出現であり、ハーディーからすれば、見知らぬ東洋の国から遣わされた求道者の出現であった。どちら側においても「神の意向(プロビデンス)」と解された。ハーディーは早速に衣服等を買ひ与え、家に引き取り、十月三十日にはアンドーヴァーに向かう。Eaton 著 *A Treatise on Arithmetic* の裏扉には「吾アントタに來り<sup>きた</sup> ヘズン君の家に寄宿せり 但波士頓ヲ發セシ時間朝十一時なり而此地に來し時ハ午後一時後なり」のメモが残る。翌日、ハーディーが理事を務めるフイリプス・アカデミーへの入学を果たした。

ところでこの「脱国の理由」のゆえに、ハーディーの新島に掛ける期待がキリスト教伝道者の養成にあることもあきらかになる。アメリカにおける新島の就学理由、存在理由がしっかりと設定されたのである。つまり

新島のその後の人生はこの「脱国の理由」の内容に即して展開され、縛られることになる。新島はアンドーヴァーの日曜学校で出会ったマッキーンにも口裏を合わせた様に同じ話を伝えている。

アマースト大学進学に際して「私がアンドーヴァーを去るときのお話では、私はアマーストで二年間、アンドーヴァー「神学校」で一年間学ぶことになっているとのことでした」(A.S.Hardy 九八)とある。ふつうなら四年かかるアマースト大学に二年間だけ行かせる計画であった。ハーデーは新島襄を伝道者に仕向けるのが目的であつて、高等教育を完成させること自体ではなかったといえよう。いずれにせよ「脱国の理由」は、新島にとってアメリカにおける人生の方向を示す「預言の書」となった。

## 二 ニューイングランドの新島襄

### アンドーヴァーに安着陸

新島襄がフリブッス・アカデミーの生徒になったときに、ハーデーは彼をミス・ヒドンの家に下宿させた。新島は「吾の寄宿屋の主はヘデン君と云ふて甚<sup>はなはだ</sup>深切なる人にして、吾を侍する猶<sup>なほ</sup>其弟の如し。且其姉子吾を侍する其子の如し。吾時々少食せしかば丸薬等を呉れ、且つ吾夜学せしかば味甘き種々の菓子<sup>なま</sup>を呉れ、衣類を補綴し且つ洗濯し呉れし事、実に我母の我を侍するに勝れりと云つへし」(新島全集5、七九)と素直な感謝の念を記す。ここで思い当たるのは船中生活、着物の裏地を取って自分で襦袢を手作りするなどの家事労働の体験で成長した姿である。

ミス・ヒドンの家には、聖職者を志すフリント夫妻がいたが、二階には、宗教には無関心なミス・チャンド

ラー（ミス・ヒドンの叔母）も住んでいた。世間には宗教的人間もいれば宗教的無関心人間もいる。これは日本もアメリカも同じである。ところで新島襄はキリスト教に強い関心を持つ日本人であり、同じ同居人のフリント夫妻は牧師志願であったからこの下宿生活は宗教的人間の出会いの場となった。日常、目の当たりにしたクリスチャン・ホームの空気が、新島の宗教観を決定づけたといえるのではないか。ミス・ヒドン、フリント夫妻らと聖書を学び、同じ教会に通った。ここで、自然のながれに添うように受洗したのであった。いわば生活の場において体現した「キリスト教共同体」であった。彼らは強い信頼の絆でむすばれた。

それは出会いから十七年後でも変わらなかった。フリント夫人から新島宛に出された一八八二年十月二九日付書簡はその雰囲気がありありと伝える、「ずいぶん長らくご無沙汰してしまいましたし、あなたの方もそうですね。しかし、私たちは今なお心は一緒にいます。私たちは毎日、そう、しばしば慎ましく同じ恵みの席にいます。私たちは同じ空の下に居り、昼は同じ太陽が光を与え、夜は同じ月がそうします。神が、唯一の神がすべてをおおい、そして同じ天上の家が私たちを待っています」と（『新島襄宛英文書簡（未定稿）（一）』、二二二）。この手紙ではかつて両者が共有していた共生の空気が、熱く生き生きと再現されている。彼らは一緒にすすわって聖書を学び、宗教的感動を共有した。時にはこの東洋からきた青年の口から聖書解釈の力強い言葉が出て感銘が広がったという。

このような新島襄のキリスト教入信の契機は、第一義的には教理忠誠に発するのではなく、また所属する地域共同体への同化という組織忠誠からでもなく、身近に接した人々の人格性に触発されたものであったと考えられる。周囲のクリスチャンが醸し出す日常生活の空気を呼吸しているなか、ごく自然に教会に馴染み、そして受洗にいたったのではないだろうか。一八六六年二月三十日のことであった。

この三か月後新島は父に宛てて書く、「以前に申せし天上独一真神の道を修め、此世の罪を償へる聖人ジイエジユスの教を守り、日夜怠たらず祈祷致し、其恩恵扶助をのぞみ、己に克ち慾を禦<sup>ふせ</sup>き、父母に孝を尽し、兄弟姉妹朋友隣人を愛する事己に齊しく、偽詐佞弁を辱ち、悪口怒言を嫌ひ候故、其風俗の美し事、何卒我朝放蕩の諸生、酒をのみ自ら英雄とか称し、世間の人を見さげ豚犬とかよび、親兄弟をけつけ、情の知れぬ女郎になじみついに癰毒<sup>ようどく</sup>に染まり、其業を失ふのみならず大切な身を亡し、父母に難儀をかくる輩に見せたくぞんじ候」と幕末時代の書生の態度を痛烈に批判するのである。さらに言葉を重ね「小子も昔の七五三太とは大に違ひ深く此聖人の道を楽しみ、日夜怠らず其聖經をよみ、道を楽しみ善を行ひ、偏に他日の成業且国家の繁栄、君父朋友の幸福をのみ神に祈仕候」と（新島全集3、三四）。「小子も昔の七五三太とは違ひ」とあるから、昔は七五三太も並の書生の振る舞いだったようであるが、今は紳士と言われる生活ぶりに変わっていた。

### マサチュセッツ州…恐怖の神権政とその世俗化

ニューイングランドのなかでも新島襄が生活したマサチュセッツ州は伝統的に新教徒たちの教会コミュニティ、とくに組合派教会が支配した地域であった。一六四七年の Cambridge Platform によって信仰簡条が完成し、「ピューリタンは其の教会と国家をバイブルの基礎の上に築かんとした」（高木八尺、一〇七頁）。つまり、この州では半世紀にわたり教権支配の政治が敷かれ、恐ろしく厳格なそして非寛容な政教一致の支配があった。バプテリスト派、クエーカー派でさえ迫害され、処刑され、魔女裁判も行われた。組合教会は税金で維持される公立教会 established church であり、信教礼拝の自由を認めない保守的な州であった。信仰の自由を唱えたロジャー・ウィリアムスはマサチュセッツ州を追われロード・アイランドに新天地を開いた。



信仰について言えば、様式主義に脱しかけていたピューリタン教会を活性化させ「大覚醒」が、一七二〇年代から盛んになった。それはたしかに一方で信仰を元気づけたが、他方では「信仰復興運動リヴァイブリズムというきわめてアメリカ的な現象を通じて、個人的体験の強調が教会のあらゆる統制の努力を次々と打ち破っていく」(Bellah、島蘭・中村訳、二八二) プロセスとなるのであった。神学としてはスコットランド哲学を身につけた形而上学者、厳格なカルヴァン教理の信奉者ジョン・エドワーズ牧師の指導のもとでカルヴァン主義信仰が最盛を極めた地であった。

しかしそこに新しい時代の影がさして来る。善悪は神の恣意的な命令に依存することを説いたエドワーズの教説、カルヴァンに忠実な「怒りの神」の強迫的説教は、あまりにも恐怖に満ちたものであった。一八世紀という時代感覚、社会感覚と合わなくなってきた。未来を悲観して恐怖のあまり自殺する者がエドワーズの教会からも出るにおよび、彼の立場に翳りが現れ、ついに一七五〇年、いかにも組合派教会らしい会衆信徒による投票の結果、二〇〇対二三の大差をもってジョン・エドワーズは二十年以上も勤めたノーサンプトンの教会から追放されたのであった([http://en.wikipedia.org/wiki/Jonathan Edwards](http://en.wikipedia.org/wiki/Jonathan_Edwards))。

ストックブリッジに移ったエドワーズはインディアンに宣教を始めたという。このエドワーズの末路はその後の組合教会の姿を予告していたかのようである。つまり、十八世紀後半、「怒りの神」は敬遠され、人々はもっと現世界と調和的な「愛の神」を求めたのである。カルヴァン主義教理の変容である。また神学の後退する時代に、聖職者ならびにキリスト教活動が自己の存在理由を、未開人、異教徒への宣教に求めるという傾向である。そして「一九世紀に入ると、宗教団体は消費者市場で競争しなければならなくなっており、個々人の宗教的好みが移り変わっていくにつれて教勢を伸ばしたり落ち目になったりした」(Bellah・同所)という。

一八三三年、ついにこの州も公立教会制度を廃止し、連邦憲法の政教分離の原則を受け入れたのであった。新島襄が新大陸に到着したのは、ピューリタニズムの世俗化がいつそう進行する一九世紀後半であった。そんな時代の潮流に抗するように、東洋からナイーブは求道精神に満ちた青年が、万里の波濤を越えて現れた。そして組合教会の幹部はこの出現を神から遣わされた事のように受け入れたのである。

### 変容する大学教育

ところで、十九世紀にはいると大学も変容する。「ある教科書について『宿題』を出し、教室で『復誦』を聞く」といったこれまでの教育スタイルはすたれ、「講義」形式で学習をより深く、広く、普遍的にする手法が導入された、とタウンゼントは『アメリカ哲学史』(Townsend、九八。市井訳、一四五)でいう。カリキュラムについては、これまでの定番科目だった古典語、数学、神学、哲学のうちで、哲学の拡大と神学の縮少がはじまった。十八世紀には「カルヴァン主義は疑いもなく道德哲学を支配した」が、頑強な戦いに敗れ、十九世紀中頃は「神学は暫時、大学の課程から除外され、聖職者の職業的研究として扱われるようになった」(Townsend 市井訳、一四五)。他方、哲学は「最も一般的な学科」(Townsend 市井訳、一四四)として受容され、哲学専門の教授も生まれたし、その分野は、自然哲学、知識哲学、道德哲学の三部門に發展拡大し、広く諸学問分野に侵入していった。

「自然哲学 (natural philosophy)」は、物理学、天文学、化学など後の自然科学の母となったものである。「知識哲学 (mental philosophy)」は、形而上学、認識論、論理学、心理学などを含んでいた。「道德哲学 (moral philosophy)」は、倫理学を中軸に、幅広く宗教学、政治学、経済学、社会学、歴史学を含んでいたが、

倫理学以外は次第に独立した科目になっていった (Townsend、九九)。そしてその「倫理学そのものにも重大な変化が起こった。(中略) 今やそれは、独断的な新教神学との関連を、殆んど断ち切っていた」 (Townsend 市井訳、一四五)。

当時「大学の学長が普通、聖職者であり、職務上哲学を講じていたことも本当であった。大学の一般的な雰囲気は清教徒的であった。それにも拘らず、哲学の授業が特にカルヴァン主義的であったことは稀である。

(中略) 大学の哲学講義は、経験主義的、理神論的なものに傾いた」 (同書、一四二) という。

事実、ブラウン大学学長のフランシス・ウエイランド、ウィリアムズ大学学長のマーク・ホプキンス、エール大学学長のノア・ポーターらは神学ではなく道徳哲学の教授として社会的影響力を持っていた。しかも、例えばマーク・ホプキンスの宗教は「古いカルヴァン主義の有する暗さから解放されていた」という (Meyer、一六)

かつてカトリック教会を牛耳っていた僧侶の権威を失墜させたのは、「聖書」を万人に普及させた印刷技術であった。しかし科学の発達と合理主義思考の普及は、今度は万人が読みはじめた「聖書」の真理性を懐疑のルツボに陥れた。科学と宗教の折り合いをどう考えるかは、この時期に登場した深刻なテーマであり、とくにダーウインの『種の起原』が一八五九年に出版されてからは、進化論と聖書の関連が神学者を悩ましたのであった。そんな時代が到来したのである。

これら時代思潮変容の波はアマースト大学にも及び、教える側にも学生にも変化がおきたという。三代目学長エドワード・ヒチコック (在任一八四五―一五四) は科学と宗教の統合と融和をはかった人物である。新島が在学中の四代目学長ウィリアム・スターンズ (在任一八五四―一七六) は四年生に啓示神学ではなく「自然神

学」を講じていた（島尾論文、北垣編、一七四）。つまり聖書の文言を真理として絶対視する「啓示神学」ではなく、理性と経験の上に築かれた「自然神学」が説かれたのである。

それでもフィーズが記録したアマースト大学の授業風景は、まだまだ古色蒼然としている。ほとんどの卒業生は硬直した授業方式について認めている。一八六七年卒業生バージェスの回想によれば、すべてのコースは必修制であり、出席は強制であった。学課目選択の自由はなく、授業出席を決める自由も与えられなかった（Fuess、一七二）。フィーズは新島襄の時代における典型的な一学生の履修生活を次のように掲げる。

「一八七〇年に入学した一年生は、ギリシャ語、ラテン語、数学が主軸をなす授業枠に押し込められ、その他ではほんのわずかの修辭学と自然哲学が添えられた。もし彼がアンドーヴァーにあるフィリプス・アカデミーのような古典学校の出身ならば、それは慣れたルーティンをこなすに過ぎないのだ。平日には復誦が三クラスあり、例外的に土曜日の復誦は二クラスである。彼の前途によこたわる四年間の勉強時間の五分の三は、ギリシャ語、ラテン語、数学に費やさねばならない。二年生になっておこる大きな変化は近代語としてフランス語かドイツ語のどれか一つと、少しの化学、古代史を学ぶことである。三年生になると物理学をいくらか学ぶ。四年生の中心科目は知識哲学と道德哲学である。学生がすべての語学を落とした場合、代わりに幾何学、鉱物学、動物学、歴史学、政治学、そして憲法に向う。それらの諸科目をあわれなほど少量学ぶ。一八六〇年代のアマースト大学の平均的學生は政治、経済が絡んだ国家問題を、教室外から吸収したことを除けば、ほとんど知らない。英文学もほとんど教えられなかった」（Fuess、一七三）。これが日本でしばしば理想化して語られるアマースト大学のリベラル・アーツ教育の当時の実態である。

このような古風な授業方法にも拘わらず、学生に与えた教育的影響力が大きかったのは、教科そのものより

それを教える教授陣が優秀で魅力的であったからだと言われる。例えばマザー教授が教えるギリシャ語は、「教科書や論点がどんなものであれ、そこから人生にとってもっとも高貴な理想を教え、仕事や行為の真実の方法を教えた。古代ギリシャの思想と生活が今日の思想と生活と密接であることを伝えた」という (Fuess、一七四)。

しかし学生の質が変わり始めたことにもフィーズは言及する、「良くも悪くも一八三〇年代に変動が始まっていたのは事実である。アマーストは次第に現世的色調を帯びていった。時代精神は正統的カルヴァン主義を力づけるものではなかった。(中略) 数を増し始めたのは都会出身の洗練された学生たちであった。かれらはより多くの快適さに慣れ、さらに贅沢を知っており、禁欲主義に逆行する者たちであった。彼らが悪徳的だったのは稀だが、小さな不善に馴染んでいた。仲間と群れるのを好み、新しい行動基準を持ち込んだ」 (Fuess、一七〇) と。新島の一年後輩にあたる一八七一年度卒業生でみると、牧師職に就いたものは一五人 (25%) に減少していた。他は法律家一五人、教師一三人、医者六人、ジャーナリスト五人、そして四人は銀行家・ビジネスマンになっていた (同所)。

新島が在籍したころの学長スターンは、「この時代のリベラリズムに対して、いやいやながら、そしてしばしば恐怖心をもちながら、徐々に譲歩をしていた (Fuess、一七二)」。しかし長老教授たちは「アマースト教育システムの独自性は、権利よりも義務を優先し、自由よりも訓練を先行する」とにある (Fuess、一七三) ことへの固執をみせたという。

## アマースト大学の新島襄

フィリップス・アカデミーを卒えた新島襄はアマースト大学に進学する。江戸ですでに高等数学を学習済みであった新島は、古典語のハンディキャップにも拘わらず大学進学の保証を勝ち獲ったようである。エフライム・フrintがシーリー教授宛に書いた入学用の「推薦状」がある。そこには新島が、聖書にたいする強い関心とそれを内面化して理解する姿勢が素晴らしいこと、洗練された人柄・礼節ある紳士と人物に関して太鼓判を押したうえで、数学が優れていること、大学での希望科目としては三角法、測量学、生理学、また化学を学ぶことで自然哲学の知識を増強すること、そして「この学生はあなたの指導の下で知識哲学、道徳哲学を学ぶことを強く希望しています」(Ephraim Flint から Prof. J. H. Seelye への推薦状。A. S. Hardy、六八)とある。

さて新島襄はアマースト大学でどのような科目を履修していたのだろうか。これまでに島尾永康による新島のノート、使用教科書からの調査があり(島尾論文。北垣編、一六三以下)、それに加えて北垣宗治は書簡内容から調査を行い(北垣著、二九一)、最新のものにアマースト大学史料を用いたダリア・ダリエンゾの調査がある。ダリエンゾによれば、推定できる彼の受講科目は、次ぎのこととくである(D'Artenzo, 三八八—三九〇)。

一年目 秋学期…化学、数学、自然哲学(力学)、解剖学と生理学

冬学期…数学?、化学、自然哲学、解剖学と生理学

春学期…自然哲学(力学と流体静力学)、生物学、微積分

二年目 秋学期…天文学、鉱物学?、数学(幾何学)、自然哲学(力学)、ラテン語

冬学期…自然哲学(物理学)、ラテン語、歴史学、鉱物学、動物学

春学期…鉱物学と貝類学?、化学、自然哲学(物理学)?、ラテン語

三年目 秋学期…ラテン語、ギリシャ語、鉱物学?、地理学?

冬学期…道徳およびクリスチャン・サイエンス、ギリシャ語、数学

春学期…?

また島尾永康による新島襄の筆記ノートおよび教科書の書き込みの調査によると、数学は一年目…三角法、解析幾何。二年目…円錐曲線(二次関数)、解析幾何。三年目…解析幾何、微積分。であり、これで数学の本身が一層はつきりしてくる。この他に化学は三年間にわたっている等の指摘がある(島尾論文。北垣編、一六八頁以下)。

新島襄の場合、第一に、通常総学習量のうちの六割をしめるというギリシャ語、ラテン語、数学についていえば、二つの古典語の学習量が極端に少ないことが分かる。古典語に代わって数学ならびに自然科学系科目の多さが目立つ。島尾永康がいうように「数学での成功が支えとなつて、困難な留學生生活を成就させたとみてよい」(同論文。北垣編、一七九)。第二に、なぜか三年で卒業している。ギリシャ語、ラテン語を履修しないで理学士(BS)の学位をとる場合、三年間で十分だったのであろうか。第三に、入学時の「推薦状」で強く希望していた知識哲学、道徳哲学を履修しないまま卒業している。ただし新島遺品庫にはシーリー教室のメモ断片、シーリー講義筆記の英文ノート(現物未電子化)の資料記録はある。

新島襄とシーリーの関係を示すのは、アドヴァイザーとその生徒のうるわしい信頼関係である。「私は先生の下で哲学を学びませんでした、長らくお傍で暮らしたことによって、かなり深く、あなたの信仰深いお人

柄とキリスト教愛を学ぶ特権に恵まれました（新島全集6、七五）」と書いた書簡である。シーリー教授のみならず、休暇中や病気のとき一緒に過ごしたシーリー・ファミリーから大きな感化と恵みを得ていたことはよく知られている。

スターン学長時代のアマースト大学には何度もリバイバルが起こったといわれる。ピューリタニズムの現世化が始まっていたとはいえ、前述のようにまだ二五%の卒業者は伝道者の道に進んでいた時代である。まだまだ宗教熱は盛んであった。ただシャイナーの分析によれば、その宗教熱が向かったのは衰退しかけた神学研究ではなく、道徳的十字軍となり国内・国外へのキリスト教伝道に出かけるという実践的な方向であった（Scheiner、一五〇）。新島襄の場合も、「宗教色の強い保守的な、卒業生の大半が聖職者となる大学に学び、聖職者志望者が激減し始めた時期に、あえて聖職者への道を選んだ」（島尾論文。北垣編、一七八）のであった。

### アンドーヴァー神学校の新島襄

一八七〇年七月一日にアマースト大学を三年間で卒業した新島襄は、すぐにアンドーヴァー神学校に進んだ。諸外国へのキリスト教伝道を進めていたアメリカン・ボードは、懷に飛び込んできた熱心な求道者であり紳士である新島と云う人材の活用術を見逃さなかったといえる。アメリカの養父ハーディーの大きな期待が彼の肩にかかっていたのである。アンドーヴァー神学校での生活は、一八七二年三月二日岩倉使節団の召喚電報以降しばらく中断し、一八七三年九月一七日に復学、一八七四年七月二日、二一名の卒業生の一人として、スペシャル・コース修了まで続いた。



在学中の前半では、日常的に病気に襲われ苦しんでいる。目が悪く読書もできないし、リユーマチのためしばしば学校を離れて静養している。

二年度目にはE.A.Parkの講義を受講している。パークはジョナサン・エドワーズの忠実な継承者であり、パーク夫人はそのエドワーズの曾孫にあたる ([http://en.wikipedia.org/wiki/Edwards\\_Amsa\\_Park](http://en.wikipedia.org/wiki/Edwards_Amsa_Park))。大学を追われた正統派カルヴァン主義がアンドーヴァー神学校に所を得ていたというべきか。抽象的な思考をあまり得意としなかった新島（新島全集10、八二）が懸命に努力している姿は、その経過をハーディー夫人宛に手紙で報告しているなかに示されている。「この学校におけるもつとも難解な年になるでしょう、なぜならそれは綿密な注意と思索を要求するからです。私の勉強はホワイト山の登山を想い起させてくれます。（一八七一年十一月七日書簡、新島全集6、九四）」と。ハーディー氏が受講を勧めたことが推測される課目である。

同志社大学同志社史資料センターにはパークの講義ノート類も残っているが、新島がパークの説く伝統的正統主義的カルヴァニズム思想に感化された様子は見出せない。帰国後の説教のなかにはパークの罪論を批判しているものがあるから、このような正統派カルヴァン主義には懐疑的だったことが想像される（『罪トハ何か』新島全集2、二八六）。その点からいえば新島襄も十九世紀の時代精神を呼吸していたのである。

ただパーク夫妻との人間的なつながりは深く熱かった。日本から新島夫妻の写真類を送り、それに返事するパーク夫人、つまりジョナサン・エドワーズの曾孫の手紙があるが、その文章には親しみがこもり温かい。「日本ミッシヨンのグリーンが親切にも小包をあなたに運ぶと申し出てくれました。それで私は写真を託しました。あなたが喜んで下さるとよいのですが。あなたの旧友たちの顔を見て喜ばれると考えました。それで夫、ミスター・パークの写真を撮るために数カ月の時間がかかってしまいました。しかし写真は最高の出来栄で

と友人たちはいいます。私の写真は、アメリカの老婦人がどんな姿をしているのか、そして勿論あなたのアメリカの友人がどんな顔なのかを奥様にご覧にいたるために送ります」（『新島襄宛英文書簡集（未定稿）（1）』一八八一年十月九日付け、二〇四）と。新島襄をまったく対等の友人として遇している。ここにもキリスト教共同体としての繋がりが見てとれる。

アンドーヴァー神学校卒業をひかえた一八七四年四月三〇日、新島はアメリカン・ボードの書記Z.C.クラーク宛の書簡にこう書く、「仏教にも儒教にも物足りなさを感じていた」そんな心の状態の時に中国派遣のアメリカ人宣教師が書いた聖書物語の漢訳に出会いました。そこに書かれた神の説明は一層の探求心を持たせました。この目的に導かれて私は家を離れ、アメリカに向けて旅立ちました。定められた摂理が私の道をそんなにも遠方に進ませ、ボストンの地に友人たちを用意し、これほど深く私の学問を支援して下さいました。この国に到着して間もなく、私は回心しましたが、しかし私は神の言葉を読んだ時から神を探しはじめていたので。私の新しい体験とともに、私の国民に福音を伝える願望が生まれてきました」（新島全集6、一三六）と。

「脱国の理由」の預言は満たされたのである。しかしさらに後日談がある。ラットランド演説である。それはハーディーの期待を越えて、あるいは「脱国の理由」の呪縛を超える一歩であった。これについては後述する。

## 文明情報の収集

学校と教会以外で新島襄が新大陸で発見したものは何だったろうか。新島襄の書簡や日記類には、見聞した具体的情報の記録が挿絵つきでたくさん残されている。内容は、農産物とその保存法、旅行先で見学した製造

工場など、多岐にわたる。その他いろいろな情報を伝えている。それは、アメリカにあつて日本にない文明国の技術等を母国の人々に知らせる使命感に由つて記録されたと思われる。

例えば一八六九年五月十日付の父新島民治宛の手紙には、汽車で近隣都市を見学して得た情報を図解とともに書き送る。スプリングフィールドでは蒸気機関を動力にするゲウエル銃製造所やライフルの弾丸づくり、チコピーの「鎔鋳所、綿布製造所」の道具仕掛け、ホリヨークの洋紙製造所等を報告する。例えば洋紙の製造については、「古き切れを収集めライムと云〔う〕」しつくいゝの如き者と一所に其を煎<sup>せんじ</sup>、其後水にひたし鋸の如き齒の切れ者にて其を寸々に切りきざみ、其上糊の如く相成候は、其を図の如き鉄の網の上に流し候、然るに水は網の目よりもり紙を其に差し置申候、但し其紙を蒸気の筒にてかわかし候間、暫時の内立派なる紙出来上がり申候」と記す（新島全集3、七〇―七一）。製造の手順を日本でも再現できるように、きわめて具体的、実践的情報として伝達するのである。自分が生まれ育つた世界と全く異質なもうひとつの世界を目撃した知識人が幸福であるとはかぎらない。西洋文明の気の遠くなるような高壁を前に、祖国を捨てゝる人もあれば、祖国に帰りついても絶望感や虚無感に途方にくれる人も出る。この点新島は強靱な精神の主で、祖国の新国家づくりに意欲的だったのである。

### 「アメリカ市民社会」を生活した例外的日本人

発見した文物機能を伝える文明情報の他、人間、人間交際、社会についてはどうか。新島がクリスチャン共同体に溶け込んだことは前述したが、もっと広い意味での生活体験として、「市民社会」に生きたおそらく最初の日本人であつた。まずアンドーヴァーで始まつた暮らしは、WASP（白人、アングロ・サクソン、プロテ

スタント）の生活、典型的なニューヨークランドの「市民生活」であった。異文化接触の驚きは、父宛の手紙のなかに活き活きと報告されている。

例えば食事風景については、「食事の義は日本とちかひ椅子に腰をかけ大なる卓上に食事いたし、箸の代りに肉剪小刀、肉叉〔フォーク〕、匕子等を用ひ、食物はパン、牛の焼肉、豚のむま煮、羊の肉汁〔スープ〕、卵の油いり、種々の野菜等、折々は魚肉等を用ひ候。食後の菓子はカステイラ、ボデイン〔プリン〕、パーイ林檎、桃、梨子、葡萄の砂糖煮、種々の干菓子、折々は米を牛乳にてにつめよき蜜をかけ食用いたし候。飲料は茶カーフィー、チョコレート、ココーと申す実などにして、牛乳と砂糖を加へ用ひ候」（新島全集3、三四—三五頁）と。これを見るとデザート付の食事をする落ち着いた家庭にホームステイしている様子が分かる。内村鑑三のように最下層のアメリカ人と接触してアメリカ嫌いになったのとは違って、幸運な新島襄しっかりとアメリカ文化を体得し評価する。

こんな記述もある。「冬は至て寒く十一月下旬より雪降続き今に雪の上を往来いたし候、池の氷厚き事二三尺に至候ゆえ人馬も無恙往來いたし候、且女子供鉄の杵をつけ氷上を踏行致候、是は殊之外面白き戯にして、ある小供は三度の食事をも忘候ほとに御座候。——中略——且当地は江戸の春とは違ひ今に鶯の初音も聞不申候、草木は雪に埋むれ、日々風吹き甚不快なる天氣に御座候、——中略——扱如此寒国とは申しながら万事都合よろしく、外行之節には羅沙之頭巾、毛織の頸巻、羅沙之上衣、ゴムの雪杓、羅沙或は革の手袋を用い候故、更に寒き思ひも不致、且内に居候折は鉄の火炉に程よく石炭或は楨をたき候故、実に融々たる春風の内に有るかと思はれ候、且烟筒をよきに備へ候故、決して烟りの難渋は不致候。」（新島全集3、三二—三三）このように、厳しい気候条件を人力で克服する住宅構造への驚きを父親に説明する。

さらに觀察報告は社会制度に及び、「さて往還は大道と小径とを分ち、其の間にエルムと樹を植付け候ゆへ、たとえ雪深く降つみ候とも決して往還をあやまり申さず候（中略）小径は諸人の往来に供し候ゆえ、車に足をひかれ馬にけらるゝ等の心配は御座なく候、かつみぞは地下に堀通し候ゆえ、小兒などのみぞにはまり候事もさらに御座なく候」と人間の安全性に配慮された町がつくられていることや、「且此アンドワは高名なる邑にして聖学校、大学校（小子罷<sup>まかり</sup>在候）、自由学校（此学校は一文も取不申候故、いかなる貧乏人も入門いたし學問修行いたし候故、此国には目あき目くら則ち読み書きの出来ぬものは一切無御座候）、婦人学校、其の外種々の邑学校、貧院、病院等有之」と公共設備の充実ぶり紹介する。

普通の人々の生活基盤、今日の言葉で言うインフラストラクチャー、が整備され良い政治が行われていることを伝える。そして「嗚呼仁政の支那日本に勝れる事ここにおいて見るべし」と評する。儒教政治の理想とされる「仁政」が、実は日本や中国よりもアメリカにおいて実現しているという判断をここで下しているのは興味深い。

このような異文化接触を人々、教会、学校、社会において経験した。それを私の言葉で言う、新島襄はそこで「アメリカの市民社会」を発見したのであった。しかも九年にわたって日々体験した意味は非常に大きかったと思われる。

### 市民的人間関係

それから人間交際の違いも発見した。徳川伝統社会の人間関係については、福沢諭吉の有名な「権力の偏重」の分析がある。江戸時代、二人の人間が集まるところ、君臣、父子、夫婦、長幼などには必ずそこに上下

関係が発生したというのである。その旧世界を脱出してニューヨークに來た新島は、別の人間関係のあり方に出会う。下宿先ヒドン家や教会でのクリスチャン共同体、大学での友人たちや教授らとの人間関係、時に教授と学生とがファースト・ネームで呼び合いながら議論する対等で風通しのよい横の関係を知ったのである。この付き合い方を、例えば後年の説教では儒教の五倫五常の論理を換骨脱退して「君臣ノ愛、夫婦ノ愛、親子ノ愛、兄弟朋友ノ愛」（愛トハ何ゾヤ）新島全集2、一七八）と二者間対等な関係に読み変えて説明した。これは專制の人間関係から民主的人間関係への大きな転換である。

市民性が身につけていたことは、特に森有礼や岩倉使節団といった日本の政府高官と会う場面で鮮やかに示された。またそこで新島襄は「市民」という言葉を使用していたことにも注目しておきたい。

フリント夫人宛書簡の中には、「私としてはむしろ自由な日本市民としてとどまり、全力をあげて主の御用のために献身したいのです」と書く。英語では free Japanese citizen という表現である。この citizen に「日本」をつけて free Japanese citizen として、こういう身分に自分を置きたいという。これは、日本政府として新島襄のためにハーディーが負担した費用を弁済する予定であることを知ったとき、「森〔有礼公使〕に対してその支払いをなされば、私はその金によって日本政府に縛られることになるからです」と伝えるなかで書かれていた（新島全集10、一一六）。後日新島は「洛陽の一平民」という言葉を好んで使用するが、おそらくその「平民」にはこの citizen の觀念を込められていたと思われる。

それから有名なのは、新島が岩倉使節団と雇用関係に入る際に見せた態度である。市民の雇用は法律上、たとえ国家と一個人間であっても対等な立場での契約関係であることを実地で実行していた。他の国費留学生とは違い、政府との臣従関係はないことを相手に確認させてから始まった。次の文章はハーディー夫妻宛の書簡

である、「…私（森）の要請によつて、新島氏は団員としてではなく、教育についてなんらかの助言をえようとして、親しくここへ来られたのです。」 「これをせよ、あれをせよと要求したり命令したりすることはできません。すべて氏とあなたとの契約によつてなされねばならないのです。」

それを政府側の田中不二磨は了解した。「この〔森公使の〕演説は田中文部理事官を大変喜ばせました。…理事官は直立している私を見た時、森氏に『隅に立っているのが新島君ですか』と尋ねました。理事官はそれを確かめると自分の席から立つて私の方に進み、私の手を握つて、きわめて上品かつ大いに威厳を保つた礼をして、私に友人になつてくれるよう求めました。理事官は、六〇度上体を傾けましたので、私も同じ礼を返しました。この部屋の後列の隅に立っている者にこういう扱いをされたことに、私は心の中で失笑を禁じ得ませんでした。」「自分が一かどの人物だとは思つたことがなく、常に人に知られないことを望んでいるので、自分が日本人の中でこのように特に区別されることに失笑を禁じることができませんでした。——中略——私は自分の権利を守り得たことを喜び、このように自分の権利が自分に与えられていることを喜びました」（以上引用文はO・ケーリ訳『新島襄 近代日本の先覚者』、三七—三八）。

つまり新島と岩倉使節の關係は契約による。民法上の対等な当事者同士として契約を結んで、通訳になるなどの仕事を決めるということを要求して実現した。ここにみられるのは市民権をもっている一人の人間は、相手が政府であつても対等な契約当事者であるとする市民意識を示している。密出国した人間を祖国が犯罪者扱いしない關係構築の工夫でもあらうが、同時に市民として対応しようとしたということでもある。このように、新島襄は市民社会を理解していた例外的な日本人であつた。

新島は人間を発見し、日常生活を発見し、もっと具体的にクリスチャン・ホームを発見し、教会を発見し、



学校を発見し、市民を発見し、市民社会を発見し、政治参加する国民を発見した。そういう過程をへて士族身分意識を超えたのだと思われる。そして新発見した貴重な価値を、教育を介し、学校を創り日本人に伝授しようとした。後日、「我東洋に新民を隆興せしめんと存じ候」（『新島襄全集3』、二五三）という。この「新民」には、おそらくニューイングランドで発見した市民のイメージが込められていたであろう。

そしてそのような市民意識を非常によく理解できたのは、熊本バンドのなかでも士族出身でなく豪農出身だった徳富蘇峰・猪一郎であった。一八八〇年代あの教会合同問題が起こった時、新島は断固組合教会の自治を守ろうと動く。そのとき頼りにしたのは徳富蘇峰であった。「君ニハ政治上ノ平民主義ヲ取ルモノニシテ、僕ハ宗教上ノ平民主義ヲ取ルモノナレハ、ツマリ平民主義ノ旅連レナリ」（『新島全集3』、四八六）。新島にこの行動をとらせた背景には九年間の米欧生活で身体に染みついた「市民性」があったと私は考える。

## 三 結びにかえて

### ブラウン宣教師のさそい

ここで気になるのは、このような新島の人生選択とアメリカ時代の養父ハーディーとの関係である。新島の未来がハーディーの意向に従って造作されるままならば、新島自身の意志はどこにあるかという疑問が残る。

この問題を考える際、島尾永康が発見した新島メモ―それはフィリプス・アカデミー在学中の教科書、E.Loomis著 *Elements of Geometry and Conic Sections* の見開き白紙部分に書かれている―はきわめて興味深い（島尾論文。北垣編、一六〇以下）。この教科書を新島は、アマースト大学でも使用しているからメモ作成日



時の確定はむずかしいが、扉には一八六七年五月九日と一八六七年十一月七日の二つの日付の記入がある。前者はフィリプス・アカデミー在学中、後者はアマースト大学時代にあたる。以下の話は、このころに起こったことであろう。対応を模索する姿の中に、当時の新島青年の苦悩が見え隠れする。

その話とは「貴殿」なる人物を介して、ブラウンのもとで仕事に就かないかという提案がなされたらしいことである。ブラウンとは横浜在住の宣教師 Samuel Brown のことであろう。

メモでは「貴殿のかくいはる、は金の為哉 若し金の為ならばワしに金を借し下され ブラウンの為ならハ小子少し論あり」と記して、文章全体を斜線で消している。

ここの「貴殿」とは、つまりハーディーのことであろう。ハーディーは宣教師を海外に派遣している団体・アメリカン・ボードの理事でもあるから、ブラウンからの話に通じていたであろう。この話に対して、新島はそれを、自分への金銭的負担の軽減のための提案かそれともブラウンからの要請か、と真意をいぶかっている。そして提案に応じるのを躊躇している。

理由はいくつかある。第一にまだ自分は学問の道の中であること、「去々さりながら僅かの学問を以て国に帰らば何の面目あつて我故人〔友人の意味〕に對せん哉」と。新島はもつとアメリカに滞在して学問を続けたかったのである。ここではとくにギリシア語に執着している。「グリークを学まなば時は延さん事を要す」とそのために滞在延長問題がおこること、その経費について「若し時を延し雜費を払い呉候ハ、他日帰国の後 経済致し僕の給金を以返済せん事件」と記す。金ならば後日返済するから、学業を続けたいというのである。

ブラウンに対してはこう書く。「小子ブラウン氏の為にアメリカへは参らず 只独立一箇の教師と為り国家人民の為、独一真神の子耶蘇の為に国を辞しアメリカへ参る」と。そして自分の使命、人生の目的を次のよう

に明確に書き込んでいた。「されと小子大学者にある事を望む。且教師と成 師匠と成 日本を教込み耶蘇のキングダムを幽暗の日本に建立せん事を要す 小子斯く辛苦致すは全く己の榮華の為に非らず 只上帝の前にあり我日本のブライトデーを見んと要す」(ノート現物より復元)と。「国家人民の為」と、「独一真神の子耶蘇の為」の二者同時に志向されていた。つまり新島襄においてはキリスト教の日本伝道を使命としながら、同時に日本と日本人民の開明を目的に学問していたことが読み取れる。

当時、米欧に留学した物分りのよい秀才たちの中には留学中は深くキリスト教に理解を示した日々をおくりながら、帰国するとそれをかなぐり捨て、大日本帝国の官吏として排外的国家主義者に転じた例もみられる(森有礼もその一人)。それに比し新島襄はあくまでもキリスト教に忠実な留学生であった。しかし同時に、新島は「日本を教込み」、「我日本のブライトデーを見ん」と、目的のなかに日本の「国家人民」の進歩改善を強調していることが目につく。この点、キリスト教布教を主目的に派遣される宣教師ブラウンなどの意識とは質がはっきり違うのである。また将来の職業を牧師でなく「教師と為り」と記していることも注目される。

またこのメモには、「或人申せしに小子は君の手に落た。然し小子の申すにハ上帝小子を君の手に落した」とある。ここに言う「君」は島尾永康も推測するようにハーディーを指すと考えられる。新島は自分がハーディーの手中にあることを認めた上で、開き直って神が自分をハーディーのもとに位置づける。これは本質的に自分の人生進路とハーディーの希望とがそう齟齬していなかったことを感じさせる。

## 国籍変更問題

『新島襄の生涯と手紙』によれば、新島が帰国について模索をはじめたのはアンドーヴァー神学校に進んだ

一八七〇年の秋からだという。しかしこれは非合法的に出国した人間が、キリスト教伝道者の使命感を持って帰ろうというわけであるから、いかに時代が明治になったとはいえ越えるべきハードルは高かった。

一八七一年二月十日および二五日に、新島は帰国方法を相談する書簡を安中藩の信頼する上司、飯田逸之助宛に送っている。二五日の書簡で、

「国を愛する志、日に益し月に長じ、我日本の隆興せん事のみ、日夜「ゴッド」に祈祷し居候、我日本の開化に進むを見ば、小生に於て余の志願は無之候、（中略）小生の亜国に於ての親友中に、亜人と相成り、亜国大統領の保護を得て、日本に帰るべきが宜しきと、若し日本人刑を加へば、亜国の大統領より宜しき所置の有之候、右の段如何致して宜しきや、是又御告可被下候」〔飯田逸之助宛書簡、一八七一年二月二十五日、新島全集3、九〇〕とあることに注目したい。

文中の「亜国に於ての親友」とは、新島の保護者でもあるハーディーをさす。ハーディーは新島にアメリカ国籍の取得をすすめ、米国の大統領の保護の下で日本でのキリスト教伝道を示唆した。新島も身分不安定な密出国者だけに迷うところで、上司に相談を持ちかけたのである。国籍変更のこの話は、ハーディーの新島に対する期待がキリスト教伝道事業そのものであることを示す証拠とみることもできる。他方、新島には日本人の文明化、日本人同胞を救済する熱い思いがあり、ハーディーとは目的意識が微妙にズレていることは後述する。

しかしその必要はまもなく消えた。この書簡直後の一八七一年三月十五日、ワシントン駐在少弁務士・森有礼とボストンで会談する機会が訪れた。そしてここで、新島は明治新政府にとって得難い人材として遇される道が開けることになった。森の仲介で一八七一年八月二十二日、明治新政府から留学免許状とパスポートが正式に発給された。ここに密出国の罪は相殺され、晴天白日の身体としてアメリカ滞在を正当化されたのである。

る。

この日を境に、これ以前と以降とは新島襄の状況が一変し、彼の生活心理も大きく違ったと見なければならぬ。密出国にまつわる不安から解消され、心配気に飯田逸之助宛に帰国方法を相談する段階は終了した。それとともに今度は、明治政府と一定の距離を保つ必要性のために新たな緊張が生まれた。またある意味でアメリカでの養父ハーディーに対しても、以前より自立的な立場が生まれた。

岩倉使節団との関わりが出来てからは、新島はさらに一層、明治新政府にとって得難い人材として囑目されるようになる。さて新島と岩倉使節団との関係は、一八七二年三月二日に電報で岩倉使節団に召喚された日から本格化した。あの病氣持ちの新島が、なぜか教育視察で全米さらにはヨーロッパ諸国を歴訪するとき元氣であった。が、七二年秋ごろからリュウマチ、不眠、めまいなどの症状が綴られている。そして、一八七三年一月ベルリンで病氣を理由に「文部理事官随行」を辞任するのであった。その後の新島はバーデンバーデンで長い湯治療法をつづけたあと、一八七三年九月二日リヴァプールを立ち、ハーディーと相談のうえ、九月十七日にアンドーヴァー神学校に復学した。

この時期、日本に派遣されているアメリカン・ボード宣教師からは、事業をうまく進めるうえで日本人信徒・新島の帰国を促す切実な声が挙がっていた。新島自身は一八七四年四月三十日のN・G・クラーク宛て書簡で、帰国し宣教事業に携わる決意を語ったことは前述した。養父の期待がこうして実現にむかったのである。そして一八七四年七月二日、特別生として神学校を卒業し、翌日にはアメリカン・ボードのN・G・クラークに会うためボストンに行っている。

## ラットランド演説

さて一八七四年十月九日、ヴァーモント州ラットランドにある組合派グレイス教会で開かれていたアメリカン・ボード年次大会の最終日、世界各地に派遣される宣教師の紹介と挨拶の場面を迎えていた。アメリカの養父ハーディーが年月をかけ、多大な費用を負担して作り上げた新島襄という作品のお披露目の舞台でもあった。彼がこのころミドル・ネーム Hardy を貰ったことは十月十三日付の書簡にある（新島全集 6、一四四頁）。新島が数奇な運命に導かれて新大陸に到着し、ニューイングランド文化に育てられ、今度は母国にキリスト教伝道の使命をおびて出発する日を迎えた経緯を簡潔に紹介したのは養父ハーディーであった。

ついで壇上に立った新島襄の挨拶は、日本に教員と伝道者を養成するための教育機関・トレーニング・スクール（神戸教会に付属）建設の必要を熱く訴え、そのための寄付を求めるものであった。その試みは成功し、その場の聴衆から五千ドル近くの寄付の約束をえたのであった。

この演説のいちばん忠実な内容は地方新聞 *The Rutland Herald* に載った記録である。それは『同志社百年史 資料編 2』に採録され、さらに翻訳されて『同志社百年史 通史編 1』に掲載されている。後者によれば「私の国は三〇〇人の学生を世界のさまざまな部分に派遣し、・・・彼らの大部分はヨーロッパで不信仰の影響の下にあります。・・・日本のような国では悪魔がはやばやと種子をまくのです。ですから私たちは悪魔を出しぬいて、福音の種子をまかなくってはなりません。神戸の教会は教育機関ではありません。その教会には何らかの学校が必要です。・・・それ故に私は皆さんに対し、約三三〇〇万人を助けるための教師と説教者を起こすべく、養成所を設立するに十分な程度のご援助をおねがい致したいのであります」（『同志社百年史 通史編 1』、一九）とある。

今日の同志社では特別に歴史的意義を強調される演説であるが、興味深い史実は、当時のアメリカン・ボードがこの演説を黙殺したことである。機関誌「ミッショナリー・ヘラルド」は全く演説内容を掲載しなかった。「そつけなく、『日本人で、近く帰国の予定である新島師（アルフィーアス・ハーディー氏）が紹介し、同師についての数奇な事実を短く語った」が出席者の中にいた」と報じていただけである」（通史編1、一〇）。

つまり日本人を教育するために「教師と説教者」の「養成所」をつくるという提案は、アメリカン・ボードが希望する事柄ではなかったのである。「教育そのものはボードの第一義的な目的ではなかったので、ボードの役職の人々は、それがいかに称賛に値するものであっても、特別な目的のためのアピールを激励する気になれなかったのである」（AsHardy, 新島全集10、一八六）。

つまりこれは、ピューリタニズムの世俗化が進行するアメリカにあつて、新教を非キリスト教世界に布教することを第一の職務としていたアメリカン・ボードと、日本人の救済を第一目的に置く新島との目的のズレを示すものであった。両者の目的が違ふのである。新島にすれば任務の第一に教育機関の設置を掲げ、キリスト教宣教事業を後景に置いても両者はやがて一致をみると考えていたのであるが。

これはアメリカの父ハーディーが物心共にわが子のように面倒をみ、学校に行かせ、ニューイングランド文化のもとで作り上げた逸材、「新島襄」が、キリスト教を東洋に伝道するというピューリタン信徒らの期待と思惑を超えて、独自に歩き始めた一歩であつたと記憶しておきたい。新島の胸には三三〇〇万人の「日本人」を文明化する使命があつた。「憂国愛民の志、益憤興し、縦令不肖の身なりと雖、何レ成業の余は帰郷し兼ねて兼而学得し學術真理を有志の子弟二伝ん事 至愚の望む所ニ御座候」（一八七一年六月「請願帰朝之書」、『新島襄―その時代と生涯―』、一五八）の志が秘められていた。日本政府と距離を保った新島であつたが、アメ

リカン・ボードの宣教師とも距離を保つ必要をこの段階から無意識に実行していたのではないだろうか。  
新島襄が祖国に帰り着いたのは、ラットランド演説から四十八日後の一八七四年十一月二十六日のことであ  
った。

#### 参考文献

- 新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』1～10巻、同朋舎出版、一九八三～一九九七年  
『同志社百年史』資料編一～二、および通史編一～二、同志社、一九七九年  
同志社編『新島襄―その時代と生涯―』同志社、一九九三年  
同志社大学人文科学研究所編『新島襄宛英文書簡集（未定稿）』(1)、二〇〇七年  
北垣宗治『新島襄とアーモスト大学』山口書店、一九九三年  
北垣宗治編『新島襄の世界』見洋書房、一九九〇年  
井上勝也『新島襄 人と思』見洋書、一九九〇年  
伊藤彌彦『のびやかにかたる新島襄と明治の書生』見洋書房、一九九九年  
太田雄三『新島襄』ミネルヴァ書房、二〇〇五年  
オーテス・ケーリ『新島襄と内村鑑三とアーモスト大学』、同志社編『新島襄 近代日本の先覚者』（見洋書房、一九九三年）  
三一―四四頁  
島尾永康『新島襄と自然科学』一八八一年、北垣宗治編『新島襄の世界』（見洋書房、一九九〇年）一四二―一八二頁  
高木八尺『米國政治史序説』有斐閣、一九三一年、一九四七年三版  
Bellah, Robert N. *Habits of heart*. University of California Press, 1985（島蘭進・中村圭志訳『心の習慣』みず書房、一九九一年）

D'ariento, Daria. 北垣宗治訳「アーモストの輝かしい息子―新島襄のアーモスト大学時代―」同志社社史資料センター第一部

門研究編『新島研究』第98号、二〇〇七年

Fuess, Claude Moore, *AMHERST The Story of New England College*: Little, Brown, and Company, 1935

McKeen, Phebe Fuller, *A Sketch of the Early Life of Joseph Hardy Neesima*: D. Lothrop, 1890 (北垣宗治訳「マッキーン『若い日の新島襄』—全訳と解説—」『新島襄とマーモスト大学』山口書店五一—七九頁)

Meyer, D. H., *The Instructed Conscience*: University of Pennsylvania Press, 1972

Scheimer, Irwin, *Christian Converts and Social Protest in Meiji Japan*: University of California Press, 1970

Townsend, Harvey Gates, *Philosophical Ideas in the United States*: Octagon Books, INC., 1934, reprinted 1968 (市井三郎訳『アメリカ哲学史』岩波書店、一九五一年)

Hardy, Arthur Sherburne, *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima*: Doshisha University Press, 1891, reprinted 1980. (新島襄全集編集委員会訳『新島襄全集 10』、同朋舎出版、一九八五年)